

心の友 『自省録』



経団連税制委員長
三菱重工業名誉顧問

みやなが しゅんいち
宮永俊一

物心ついてより、心に残る幾多の書籍にめぐり合ったことに感謝している。中でも、初めて読んだ時から60年近く、世間知らずの若き頃は純粹に感動し、社会に出てからは読み返すたびに理解が深まり、心が励まされ、生きる姿勢が正される特別な一冊が『自省録』だ。ローマ帝国の五賢帝の最後で紀元2世紀後半に生きたマルクス・アウレリウス・アントニヌスが、日常思い、願ったことなどを古代ギリシャ語で書き残した備忘録である。

ギリシャからローマに伝わったストア哲学に深く通じ、激務の中に世を去った皇帝への尊敬故か、その備忘録が伝えられ、識者により書き写され、さらにラテン語や他の言語に翻訳され、注釈が加えられ、中世以降は印刷技術の発展とともに、多くの国々で読み継がれてきた。なお、名訳といえる日本語訳を神谷美恵子さんが医師と母親業の傍ら大変な努力の末に完成されたのが私の生年(1948年)であることに奇縁を感じている。

この書の中で、著者が様々な表現で繰り返し言及するのは、宇宙を導く理性(神)が存在すること、変化しながら無限の時を刻む宇宙の中で、個人が一瞬の人生をよく生きるために磨くべきは理性と徳であること、及び全ての人々や物事に接するに謙虚であることの大切さである。また、人の欲望や苦悩、社会が有する矛盾や課題などの現実を客観的に受け入れたうえで、自

らの叡智のレベルを高めて理想を追求していくことの重要性を述べている。その豊富な学識に基づく語り口は率直であり、謙虚さと温かい人間性にあふれている。そして最近では、私が年を重ねたせいもあるが、悩みを超え、雑念を振り払う著者の自己抑制心の奥底に、東洋の輪廻転生や衆生済度の考えにも通じる、ある種の諦念と多様性の肯定を感じ、偉大な皇帝が少し身近になり、かつ今まで以上に尊敬する存在になってきた。最後に、飛躍的に発展した科学・技術の恩恵を受ける現代社会は、その恩恵の偏在による国・地域や人々との富の格差拡大や対立・分断という難問に直面する一方で、さらなる飛躍可能性と問題増幅リスクが混在する人工知能の開発競争の中にある。このような状況下、良き社会を後世につなぐため、科学技術の利用や政治経済のあり方を皆で考えていくことの重要性は増しており、世界の多くの人々に感銘を与えてきたこの書が訴える理念は道標の一つになると思う。



著者：マルクス・アウレリウス
発行：岩波書店

